2015 年度卒業研究

現代の若者の身体加工に対する意識

藤女子大学文学部

文化総合学科　1215095

吉本　夕梨奈

担当教員　野手修教授

序章

2013 年 9 月、北海道恵庭市のある温泉施設にて、北海道平取町で行われていた先住民族（マオリ族とアイヌ民族）の言語を学ぶ会合に招かれていたニュージーランド・マオリ族の女性が顔にいれずみが入っているという理由で温泉への入浴を断られたというニュースがあった。その女性は唇と顎にいれずみを入れていた。もちろんそのいれずみは反社会的意味でも無くファッション的理由で入れた物でも無い。マオリ族の伝統的ないれずみである。しかしその施設従業員は規則に従い入浴を断る判断を下した。

施設側の意見は、「いれずみが入っている事により他のお客様が気分を害する。規則は規則なのだから､たとえそのいれずみが民族の伝統的な物であっても例外は認められない。」という。この事例は、現代の日本ではいれずみは印象の良いものではないこと、そしていれずみに対して嫌悪感を持つ人が多いということを示唆している。日本人がいれずみに対して嫌悪感を抱くようになった背景にはどのような歴史があるのだろうか。

日本列島各地に属したアイヌ民族や沖縄諸島の民族の伝統的な慣習としてのいれずみは、通過儀礼としての意味を持ち、民族の中での社会的な位置付けと深く関わりを持つと考えられる。また、近代日本で行われて来た“入れ墨”と表記するべきいわゆるやくざにとってのいれずみも、民族にとっての物と意味は異なるが、ある集団の中での社会的位置づけに関わるという点では共通している。そしてどちらも、他人から見える身体の部位にいれる傾向にあり、他人に見せることを前提としているものと考える。

一方で現代では、一般人の間でもいれずみを入れる人もおり、それはやくざにとってのいれずみや民族の伝統的ないれずみとは異なり、所属する集団で決められた訳でもなく、自らの趣向で、自身の体に針を入れる。山本は、現代のいれずみ、いわゆる“タトゥー”はファッション化しているという。[1]これは 1970 年代にアメリカで始まった物というが、ファッションとはそもそも流動的で、一時の感情によって変わるものである。いれずみの場合、一度体に付けた傷は一生消えないのだ。だからこそ、若者は単なるファッション感覚のみでタトゥーを入れているとは考えにくく、むしろ現代のタトゥーは、日本では他人に見せることを前提とはしていないように思われる。そのため、民族ややくざの「いれずみ」と、現代の一部の若者の間で好まれているタトゥーは別の意味合いを持っていると考えられる。

[1]山本百合子　2008 年「体の美しさに関する研究(その 19)：化粧の文化について(3)」

第 1 章では、日本列島の民族伝統的ないれずみについて、アイヌ民族のいれずみ「シヌエ」や沖縄諸島の伝統的ないれずみ「ハジチ」について述べる。第 2 章では、いれずみが自己呈示の内在化おける役割を果たす物として捉えながら、日本において「いれずみ」が「日本書紀」や「古事記」の時代から、犯罪者の印としての役割を作り上げてきたことによって反社会的な存在の印という印象を与えるようになった経緯について述べる。第 3 章実際にタトゥーを入れた人やタトゥースタジオを経営する方へのインタビューを中心としたフィールドワークを通じて、タトゥーを入れることに対して現代の若者がどのような考えを持つのか、検証していく。[2]　そして第 4 章では現代の日本でいれずみが社会的に認められていない現状について述べる。

民族の伝統としての「いれずみ」、反社会的存在である印としての「いれずみ」、そして現代の若者にとっての「タトゥー」は、それぞれ目的は異なるが、“除去できない、身体に傷を付ける行為”としては、いずれも何らかの心理的な影響を及ぼすという点では共通していると考える。そこで本稿では数ある身体加工の中でも、現代の日本で未だ“反社会的な存在である印”というイメージが根付いている「いれずみ」について追及しつつ、現代の若者が「タトゥーを」入れる理由やその意味合いを明らかにしたい。

[2]「いれずみ」という言葉に対して 2 つの漢字表記がある。江戸時代の刑罰に由来する意味の「いれずみ」には「入れ墨」とする表記が多く、現代にも用いられる「いれずみ」には「刺青（いれずみ・しせい）」との表記が多い。現代のテレビや新聞、インターネットにおける各種メディアではその違いに関係なく「入れ墨」と表記するケースも多く見受けられるが、意図された実際の意味と比較すると、社会的イメージにおける誤解を招く可能性もあるのではないかと考えられる。そのため本論文では、いれずみを民族の伝統的な「刺青」と、やくざや江戸時代の犯罪人にとっての「入れ墨」の 2 つに分け述べていくが、表記上はひらがなで統一し「いれずみ」とする。また上記 2 つの他に、近年の一般的な日本人の若者が個人の自由で入れるいれずみについては、彫り師やいれずみ愛好家の中でも多く使われている、英語の「Tattoo」に合わせて「タトゥー」と表記する。

第１章　民族の伝統文化としての「刺青」

民族独自の伝統的なものとして、いれずみの文化を有する民族が存在する。以下、現在日本列島に属する民族の中でいれずみの文化を有するアイヌ民族と沖縄諸島のいれずみについて述べる。

１．アイヌ民族の伝統的刺青

(a)アイヌの女性の化粧「シヌエ」

吉岡によると、

「アイヌは入墨をシヌエあるいはヌエと呼んでいる。集落には、熟練した老婆が２，３名いて、娘に入墨をやった。術者は鍋底の煤で、入墨をする部位に一定の文様を描く。この煤はふだん火を焚いている場所のものではなく､必ず別のところに火を焚く場所を定め、そこで焚いたものを使用する、術者は布を巻いて先端だけを出した剃刀などの刃物で、細い切傷をつけ、そこに煤をすりこむ。」[3]

アイヌの間では、入墨をしていない女性は一人前と見られず、結婚の対象とならなかった。また入墨をしている女性が非常にきれいとされたために、女性の多くは美しくなりたいと望んで、結婚前に入墨を始め、結婚前に完成しようとしたと考えられる。

アイヌの女性は、入墨によって美しく化粧するという考えが多く、いれずみ本来の目的を身体装飾とする研究が多く見られていると吉岡はいう。

(b)宗教的な理由で入れる「バキサラ」

瀬川は、アイヌ民族のいれずみは地域差があるものの、思春期以降の女性を対象としていることが共通していると報告している。

以下、1972 年、瀬川による当時 94 歳の北海道胆振国白老の女性への取材である。

「入墨は、唇の上に少しずつ入れて、だんだん大きくした。20 歳前にするが、そのころになると入墨がほしい。11 歳くらいの時、雨の降る日に、ばばたちが集まったところで、『お前もや』と押さえられてやった。（略）ちょっと上唇にやるのをタネボシヌエといい、16 歳の時にバキサラ（口の端の入墨の尖った所）をつけた。あまり早くすると、あしがさがるという。痛くてもとても欲しいもんだ。眉の間にも（ランヌマ）手にもする（テキヒ、テック）。バキサラ（入墨）せぬと、死んでから竹のマキリで切られるという。」

[3]吉岡郁夫 1989 年『身体の文化人類学　身体変工と食人』雄山閣出版 pp.59-64.

また、いれずみを入れないと、「極楽に行くときに、ひどくいじめられて、よしを割ったもので切って入墨をされる」「品がないように見える」（日高国沙流川）、「口を染めないで嫁にやると、男がカムイノミ（神拝み）に出られず、出世しないと叱られた。」（日高国浦河西舎）、とも報告されている。[4]

アイヌの女性にとっていれずみは一人前の女性である証であり、憧れの対象であったのであろう。

２．奄美大島・沖縄諸島の「針突・ハジチ」

20 世紀初頭まで、奄美諸島から八重山諸島をまでを含む南西諸島に住む女性たちの間には両手にハジチ（針突）と呼ばれるいれずみの習慣があった。ハジチの文様は各諸島により異なるが、いずれも女性たちはそのいれずみ「女性の美しさの証」とした。

小野によれば、『沖縄風俗絵巻』には女性の手には王宮婦人から田舎の平民まで身分に関わらず、「X」や「＊」などの絵柄のハジチが描かれているという。[5]

ハジチの意味は、ハジチをしなければ他界の神に叱られ後世に行けない、という言い伝えに対する厄除けや、死後、後世で先祖に会った時に親類縁者と分かって貰えるような模様を身に付ける事にある。また宮古島の女性は「ハジチをしないと男の手のように固くて黒い手になる」という手が美しくなるとの言い伝え、さらにはハジチをしていない女性は、ふしだらと言われてしまう事もあったそうだ。沖縄のハジチは女性としての美しさ、身を守るための印、死後の世界へのパスポート的存在であったようだ。

そして、婚前に施す儀式としてハジチの痛みに耐えることで結婚後の人付き合いや姑付き合いにも辛抱できるように、というまじない、ハジチを見た偉人を驚かせて他の土地（大和など）へ連れて行かれないようにするため、など様々な意味合いがあった。

その 1530 年代から続く沖縄諸島のハジチも、1786 年の琉球王朝で制定された成文刑法典「琉球科律」で定められた盗みの刑に対し顔にいれずみを入れる黥形の導入の影響もあり、明治に入ると日本政府の近代化政策でまずは廃藩置県により鹿児島県下に入った奄美諸島、続いて琉球処分により沖縄、宮古島、八重山の各諸島に対しいれずみの規制が行われた。そして 1899 年には「刑法違刑罪全部実施の件」の発令で、ハジチはついに全面禁止されてしまったのである。そのように“禁止されているもの“という印象もあり、その

[4]瀬川清子 1998 年『アイヌの婚姻』未來社 pp.11-16.
[5]小野友道 2010 年『いれずみの文化誌』河出書房新社 pp.33-34.

後は沖縄県にも日本同様に、「刺青（ハジチ）を入れている人は悪人だ」という印象を持つようになったと考えられる。

しかし一方では、沖縄諸島の女性の中には、そのように伝統やまじないの意味を込めたハジチを隠れて入れる人もおり、1899 年 10 月 14 日には縣訓令第 105 號「刑法違刑罪全部実施ノ件」によって、ハジチが警察による取り締まりの対象となった。

このようにハジチの規制後は社会から排除されるべき物としての扱いを受けるようになった事で人々からのハジチに対する社会的価値観も次第に変容して行き、美しいという見方はされなくなったのである。

以上、アイヌ民族にとってのいれずみは女性である証や勲章として、沖縄諸島の民族にとってのいれずみは女性としての美しさという事に加えその民族の一員である事を証明する物であった。両方の民族に共通することは、このように特定の文化の中での「美しさ」を表す身体装飾であるということに加え、婚礼の際の必須条件である事、民族の一員としての社会的地位に関る等、その民族に属し自分の身を守って生活する為に必要な物として社会的意義を持っていると言えるだろう。

このように民族にとっての身体加工は、身体に何らかの永久的な傷を残すことによって、一般的な集団から離脱するとともに、ある集団の一員として身をおくことの表明でもあると考えられる。

第 2 章　自己呈示の手段としてのいれずみ

1. 反社会的存在であることを表すいれずみ

松田は「古代において、刺青とは、外からおとずれた不幸であり、宿命である。古代も今（近世）も、ともに暗い。しかし今の暗黒は、すくなくとも個我による択びである。うちなるものの必然としての発露である。かくして刺青復活のこの原点において、あえて要約するのならば、刺青とは刑罰であり、愛の秘儀であり、下層民の、アウトロウたちの、負でありとおすことによってはじめて自己たる逆英雄たちの、血まみれの自己顕示であった。」と述べている。[6]

このようにいれずみは古代から一般的なものではないとされてきたようだが、このように反社会的なものとして認識されるようになったのはどのような背景があるのだろうか。

[6]松田修 1989 年『日本刺青論』青弓社 p.149.

日本におけるいれずみに関する最も古い資料は『魏志倭人伝』にあり、漁猟の海難を避けるためのまじないの意味や、装飾としてのいれずみをしていたとの報告がある。[7]また、山本によればその後の『日本書記』『古事記』には、奴隷と刑罰の印としていれずみを入れる習慣が始まったという記録がある。[8]

その後奈良時代から室町時代末期までは途絶えたが、松田によれば江戸の寛永時代には突如、遊女と愛人（客）の間の愛の証としてのいれずみとして栄えたとの記録が残っている。遊女は肌の限りに愛人の名前のいれずみを入れる。愛人の名前は一度彫り込まれれば永遠に遊女の肌に残るものであるから、一度肌に浸透した瞬間に遊女と愛人との間での関係が表面的にも内面的にも永遠化したと考えられている。遊女の肌にあるいれずみは「肉体の部分でありつつ肉体そのものではない。それはすなわち表象の心象化、心象の表象化である。表象・肉体、その両者を暗く結繋する聖なる紐帯である。」[9]

いれずみを身体に入れることが相手への愛情を永遠化させること、すなわち外面から内面への影響を与える目的であったと考えられる。

また江戸時代末期には一大刺青ブームが巻き起こった。なかでも老中・水野忠邦による浮世絵や美人画の禁止など幕府の理不尽な弾圧に対して反逆の意を込めた浮世絵師歌川国芳の絵画が流行り、それをそのまま刺青の絵として腕や背中に掘るのがステータスであったという。これには、いれずみは一般人の為の物ではなくあくまでも「反社会的な存在の印」として存在していたという事が見受けられる。[10]

1872 年（明治 5 年）には明治政府による太政管令によって、刑罰としての「入れ墨」（次項で述べる）が禁止となり、同年 11 月には当時の東京府知事によって装飾としての「刺青」を入れる行為が禁止されたのである。それ以降、日本では 1948 年（昭和 23 年）までの間、非合法な物として、陰のアートとなって行ったのである。

2. 刑罰としての「入れ墨」

いれずみを入れていない人に、いれずみを入れる事に対する印象を挙げて貰うと「オシャレ」「カッコイイ」という反応を示す人もいるが「やくざが入れるもの」「昔の犯罪者のしるし」という印象を持っている人のほうが圧倒的に多い。このようなかつての“犯罪者”

---

[7]松田修 1989 年『日本刺青論』青弓社 p.16.
[8]山本芳美 2005 年『イレズミの世界』河出書房新社 p.83.
[9]松田修 1989 年『日本刺青論』青弓社 pp.139-140.
[10]山本芳美 2005 年『イレズミの世界』河出書房新社 p.93.

としてのいれずみは私自身も何となく知識はあったが、実際にはいつの時代から、どのように“犯罪者の印”と認識されて来たのか。

江戸時代、幕府は1665年と1682年に「御定書百箇条」を定め、その中で黥刑を刑罰の中に取り入れた。黥刑とは、犯罪者の額に初犯時には漢数字の「一」、2回目の犯罪にはカタカナの「ノ」、3回目の犯罪時にはその反対向きを書いて「大」という字にし、4回目になるとさらに点を足して「犬」という文字を完成させる。これは、「犬にも劣る人間である」事を見せしめたのだという。このように体の最も見えるパーツである顔にいれずみを入れる事で、再犯防止に繋がる。しかしこの額の文字は自らが犯罪者であると言う事を語るので、逆に犯罪者が周囲を怖がらせ、恐喝をし易くなってしまった事により「いれずみを入れている人は怖い」という、現代でも続くいれずみに対する印象が出来上がったと考えられる。山本は、以上の理由により近代日本では顔へのいれずみをしなくなったのではないかと指摘している。[11]

3. やくざが組織への忠誠を表すいれずみ

人間が自分自身についての情報を他者に伝えようとする際に、思っているまま、感じているままの自己像ではなく、「選択した」自己像を伝えることを「自己呈示（self-presentation ）いう。自己呈示とは、自分にとって望ましい印象を与えようとする際に行う意図的な振る舞いである。人間は常に本来の自分を他者に見せているわけではない。前項で、日本人は刺青に対し「やくざが入れるもの」という印象を持つ人も多いと述べたが、すべてのやくざがいれずみを入れなければならない訳ではないし、もちろんいれずみを入れたからやくざ、という訳ではもちろんない。だが、世間的にはそのような印象をもつ人が非常に多い。

やくざについて文化人類学の視点から研究したヤコブ・ラズは、『やくざの文化人類学』において以下のように述べている。

> 「もしヤクザの見習いが、高額の金をはたいて刺青をしたとすれば、その時点で彼はその地位を作り出し、同時に増強し、かつ表明したことになる。彼は持っていないお金を使い（刺青を彫るにはかなりのお金がかかる）、身体にヤクザとなった永遠の印を刻みつける。その気になればカタギにこの印を見せ、脅すこともできる。ヤクザの一員となる決意を見せたのだから、組の中での地位も上がるし、また刺青をしてもらうときの苦痛に耐えたことで男を上げることにもなる。ヤクザの見習いが、ヤクザ

[11]山本芳美 2005年『イレズミの世界』河出書房新社 p.100.

の成員になる前に刺青を彫ることもよくある。そうすればヤクザとカタギの双方に、（公式にはまだ組に入っていなくても）ヤクザ界への参入を表明することができる。これこそ、デモンストレーションがヤクザという自己の所産であると同時にそれを形作る要因であるという弁証法的な性質をもつよい例である。ヤクザの自己呈示によってなされるコミュニケーションは、本省で示されたように両刃の剣である。ヤクザは同一性を伝えることもあれば、他者性を伝えることもある。あるときは『私はあなたと同じだ』と言い、別のときは『私はあなたとは違う』というのである。」[12]

痛みに耐える事で自らの強さ、地位を誇示する。そして自身の刺青を見せることで他人を恐れさせる。やくざにとっての刺青は、ある集団での地位や名誉に関わるという社会的意義を持ち、自らをよく見せたい、強く見せたいという気持ちの表れである。

またヤコブは同書にて自己呈示について以下のようにも述べている。

「自己の呈示は、内面の自己や内にある実質を外に向かって表現したものではないということを証明している。自己が先にありその結果として、あるいはその所産として自己呈示があるのではない。それどころか、呈示がその自己を決定する要因であるかもしれないのである。つまり自己がパフォーマンスによって形作られるのである。呈示、表示、デモンストレーション、パフォーマンスは二重の効果をもつ。それらは一方では、さまざまな実用的目的のためその筋の物であることを宣言する道具である。もしヤクザらしく見えなければ、ヤクザとして扱ってもらえず、そうなれば地位を失い、ヤクザの世界の内外で尊敬されなくなり、結果的にはヤクザとしてもらえるはずの仕事や収入も得られなくなるだろう。ヤクザらしいことはヤクザとして生き残るために決定的に重要なことなのである。」[13]

これは内面と外見は別物である事を示すが、外見を変える事で自分の内面にも何かしらの影響が出るとも言っている。そして二重の効果とは、自らの外見すなわち呈示、表示、デモンストレーション（やくざにとってのいれずみがこれにあたる）、パフォーマンスが一つは相手に印象を与える事、もう一つは自分の内面にも影響を及ぼすと言う事である。自己呈示は本来、他者に向けられた行為であるが、自分自身にも影響を与えることがあり、それを自己呈示の内在化と呼ぶ。上記のように、やくざにとっていれずみを入れることは、自分を強く見せようとする振る舞いであり、その結果として自分が他人から恐れられている存在である事を自覚するのである。ただし自己呈示の内在化は自分の行動を他者に見せることが重要であり、誰にも見られていないところで自己呈示を行っても、自己呈示の内在化は起こらないとされている。

---

[12]ヤコブ・ラズ著　高井宏子訳 1996 年『ヤクザの文化人類学－ウラから見た日本―』岩波書店 p.159.
[13]ヤコブ・ラズ　同書 p.157.

第 3 章　現代“タトゥー”文化

現代の“タトゥー”は、第 1 章や第 2 章で述べた従来のいれずみのように他人に「見せること」による効果を目的とするわけではないため、自己呈示の手段ではないと考える。では現代のタトゥーは、どのような意味合いで、どのような効果をもたらすのだろうか。

近年では、いれずみを入れた人やピアスや染髪などまるでファッションの延長のように様々な身体加工を施している若者が目に入る。その中でも、いれずみは少数派であり、日本の身体加工文化に未だ根付いてはいない様に思われる。ファッションとして初めに思い付く物は洋服やアクセサリー、靴、鞄など身に着けて装飾する物が大抵であるが、その他にも現代では時々で変えられる染髪や、体に穴を開けるピアスが挙げられる。自身の周りの女子大生を見ても、ピアスの穴を開けお洒落を楽しむ人の数がとても多い様に感じられ、今や耳であれば身体に穴を開ける等抵抗が無くなって来ているような印象を受ける。その中で、いれずみも完全には現代社会に肯定されていない存在であり続けながらも、「カッコよさ」を求めて、自身の皮膚に針を入れたり、耳や鼻に穴を開けたりする事により身体加工を施す人の数は増えている。もちろんそれは日本だけで無く欧米人やアジア人の若者の肌にもそれはしばしば見受けられる。

しかし、タトゥーが若者にとって身近な存在となって来ている中で、現代の日本のメディアでは「過去にいれずみを入れた事に後悔し、消したい人が増えている」「いれずみを消したくて形成外科に駆け込む人が増えている」「いれずみを入れたら就職できない（場合もある）」等と、いれずみに対して決して肯定的ではない報道が多い事から、世間的にいれずみは未だファッションとしての市民権を得てはいないと考えられる。

1.「タトゥー」への憧れ

いれずみに対してのイメージは「怖い」「やくざが入れる物」「昔は犯罪人に入れた物」という人も多いのは事実であるが、自身の周りの大学生はいれずみに対して「カッコイイ」という感情を持つ人も少なくはなかった。欧米人俳優やモデル、歌手など若者の憧れの的でありファッションアイコンとなる人々が星柄やハート柄、自らのイニシャルを背中や首筋、手足の指にワンポイントのタトゥーを入れており、それを「オシャレ」として雑誌やインターネットで紹介されている例も有り、それらが欧米をはじめ日本を含む各国の若者

タトゥーを入れることに憧れを抱いているという友人に話を聞いてみたところ、彼女の好きなアメリカ人の女優がタトゥーを入れており（もちろんそれを公言し、メディアでも公開している)、その影響でタトゥーを入れてみたい、と思った事があったとのことである。しかし、彼女の両親がタトゥーに対して反対している事や、日本社会で生きて行くのであればタトゥーが入っていない方が暮らし易いと考え､タトゥーを入れるのを辞めたそうだ。「もし自分が、アメリカのようにタトゥーに対して寛容な国に住んでいたなら、すぐに入れているだろう。」と彼女は言う。

日本人の若い女性にとってハリウッド女優や海外の女優は憧れの的であり、その彼女たちが入れている“タトゥー”そのものも、“カッコイイ”し、憧れの的となっているのだ。もちろん日本においてもテレビにも出演する有名な歌手やタレントが「愛の証明」として恋人や子供の名前を腕など他人から見える場所に刻んでいる例が少なく無い。そのような表舞台に立ち「かっこいい」とされる人々が刺青を入れるケースが増え、感化された一般人が恋人の名前や自己啓発の言葉の刺青を入れる流行が急速に進んで行ったと考えられる。

これは、スポーツ少年にとってはまさにヒーローとも言える、スポーツ選手の例にも当てはまる。メディアには毎日の様にスポーツ選手が登場しており、近年では多くの選手の腕や足などに刺青が見られる。彼らがタトゥーを入れる理由は日本の伝統的ないれずみの意味合いから考えると、タトゥーを入れる事で強さをアピールし、相手を視覚的に威嚇する為という考え方も出来る。海外のスポーツ選手は特に、タトゥーをユニフォームで隠すわけでも無く腕や首など見えやすい位置に施術しているケースが多い。

このように、ハリウッド女優やスポーツ選手をはじめとする、人々の憧れの的となる著名人の肌にあるタトゥーは、デザイン自体がかっこいい、というだけで無く、各々のタトゥーにメッセージが込められている事までもが、憧れる対象として若者に影響を与えていると考えられる。

2. アメリカ文化におけるタトゥー

「日本人はタトゥーに対して厳しすぎる。欧米人はもっとタトゥーに対して寛容であるのに。」という意見をよく耳にする。確かに、日本に来る観光客の腕や足には大小様々な刺青が施されている姿を目にするし、彼らはそれを隠そうともせず堂々とファッションの一部のように見せて歩いている。しかし本当に、欧米ではそのように刺青を入れることはオシャレの一環で、刺青を入れていても誰も否定的な目では見ないのだろうか。

山本によれば、アメリカ・ニューヨークでは 1997 年の州法の改正により 36 年ぶりのタトゥーが解禁され、タトゥースタジオの営業が公認された。これをきっかけにニューヨーク州におけるタトゥー人口は急増し、州の自然史博物館の一室では「Body Art :Marks of Identity」という特別展も開催された。この催しでは、紀元前 3000 年から現代まで人類が施して来た多彩な身体装飾を概観する試みがあり、古代の身体変工やインド人女性のヘナ化粧など数多の身体装飾のあり方が展示されていたという。[14]しかしこれが 36 年ぶりのタトゥーの解禁というのであれば、その以前、タトゥーはどのように寛容されて来たのか。

1960 年代、アメリカでは長引くベトナム戦争に対する反戦の意を表すために、既成の社会概念、価値基準を拒否し、魂の自由な解放を唱える若者が急増した。そのような中、カリフォルニア州サンフランシスコを中心とした都市では、カリフォルニア大学バークレー校におけるフリースピーチ運動をはじめとする学生運動や、カウンターカルチャーの一つである、いわゆる「ヒッピー」の文化が流行した。ヒッピーの文化は、伝統的な社会制度やキリスト教の価値観を否定し、ドラッグやカルト集団（東洋の思想と宗教に影響を受けたもの）など反社会的な行動が見られた。彼らはコミューンと呼ばれる政府による福祉共同生活施設で暮らし、その中でファッションや食生活の部分においても、独自の文化を形成していった。その文化の一つとして、「タトゥー」も取り入れられていたのである。

ヒッピー文化の中でのタトゥーは、当時ヒッピーたちを翻弄したドラッグ関連の言葉やオカルト図案、ヒンドゥー教やチベット族・仏教に由来する文字等のデザインが主流であった。当時のアメリカでは、白人至上主義団体等の構成員は、多くの割合でタトゥーをしていたなど、社会からのドロップアウト、またはアウトローとして生きていく事を誇示するという意味合いが見られる。

また、1960 年代のアメリカで誕生した新しい映画のジャンルに、「アメリカン・ニューシネマ（英：New Hollywood）」が在るが、これは従来のハリウッド映画のように「観客に夢と希望を与える」物ではなく、当時ベトナム戦争への軍事的介入を目の当たりにする事で、国民の自国への信頼感が崩れ、懐疑的になった国民が、アメリカの内包していた暗い矛盾点（若者の無気力化・無軌道化、人種差別、ドラッグ、エスカレートしていく暴力性など）にも目を向ける事になり、各地で糾弾運動が巻き起こったアメリカの世相を投影していた。この様な映画の登場人物の多くが腕や足首にタトゥーをいれており、当時のアメリカの若者にとって大きな影響を与えたのでは無いだろうか。

[14]山本芳美 2005 年『イレズミの世界』河出書房新社 p.14.

いずれにしても、日本と同様にアメリカをはじめとする欧米にも、タトゥーを入れるという行為には、何かに反抗したい、主張したいという個人の特別な思いや決意を自らの身体に刻むことで、アウトローとして世間と距離を置くという目的があったのではないかと考えられる。

3. 現代の日本人の若者がタトゥーを入れる動機

（札幌市南区 Mountain High Tattoo Works 茂野健さんへのインタビューをもとに）

では、このように社会において“タトゥーは反社会的な存在である印”というイメージを持たれる事が未だ強い社会にいながらもタトゥーを入れるのは、現代の日本では一体どのような人で、どのような思いを込めて入れる人が多いのか。

実際に、札幌市南区でタトゥースタジオを経営する茂野さんに、タトゥーに関するインタビューを行った。 タトゥーを入れる客の中は、どのような人が多いか、という質問に対して、「タトゥーを入れる人の中には、アパレルショップ店員や美容師などファッション界で活躍する人や、ミュージシャンやデザイナー、学生、プロサッカー選手、漁師、介護福祉士、飲食店員、薬剤師、自衛官や札幌市職員、学校職員や教員など公務員の方もいらっしゃいます。中でも多いのは会社経営者。“自分はこの仕事しかない。サラリーマンには後戻り出来ない（刺青を入れると一会社員として雇って貰う事が難しいかもしれないから）”と覚悟を決めるために入れる方が多いです。」という答えが返ってき来た。もちろん職業柄、仕事中には服で隠せる部位にタトゥーを入れるケースが多いが、職業や年代は幅広く、どの様な人に多いかは一概に言えない。タトゥーという“消せないアート”を入れるという事は相当な覚悟が必要であり、自分の中で何か決意をしてこれからの人生を歩んで行きたいという気持ちを持った人がほとんどであると言う。また被施術者の中には、自分の中に自責の念を感じ、それを一生背負って生きて行くという印として入れる人や、大切な人の痛みや苦しみを自分もタトゥーを彫ることでその痛みを感じ、その証拠が体に残ることで理解したいという思いで入れるケースも有るそうだ。これにはタトゥーを入れることで今までの自分と決別し、新しい自分になるという意志が見られる。

タトゥーを入れるということは当然自分の身体に針をいれる事、身体を傷つける行為であり、当然の事だが痛みを伴う。2008 年に公開された映画「蛇にピアス」では、主人公のルイという女性がある彫り氏との出会いをきっかけに、背中に大きな龍の刺青を入れる。彼女は“痛みに耐える”事で生きている感覚を取り戻すという理由でタトゥーを入れてい

る。もちろん、ただ痛いだけでなく、その痛みの経験が自分の身体に一生残るのだから、痛みを忘れずにいられるのだろう。実際に刺青を入れた事があるという知人は、刺青を入れる際の痛みを伴う施術に対しての抵抗はなかったのかという質問に対し「多少の不安はあったが、今後一生残る物だと考えたら痛みは気にならなかった。痛みを感じないなら、刺青を入れる意味はないと思った」と言う答えが返ってきた。身体にタトゥーを施している人々にとって、自身の体に一生消えないタトゥーを入れるということは今までの自分とは違う自分になるという意味が込められており、痛みを伴う施術だからこそ記憶に残る。そのため、意味のあるものになるのではないだろうかと考える。

第 4 章　“タトゥー”は日本社会に受け入れられるか

安田によれば、ドイツ人医師ベルツは 29 年間における日本滞在で、日本人のいれずみ研究についての報告をしている。

「ドイツ人の船乗りは指先とか手のひらくらいの小さいイレズミをするが、日本人は全身や四肢いちめんに大きなイレズミをする。とくに注意しなければならぬのは、日本人は頭、頸、足にはけつしてイレズミをしないという点である。イレズミをするのは、いつも下層階級に限られている。上流階級のものは、イレズミをするのを恥としている。イレズミはもつぱら、大都会の職人やかごかきのあいだに大衆化している。こんにちでも、人足や仕事師でイレズミのない肌をみせたなら、それはじつにめずらしいことである。…」[15]

ベルツの言葉からも、日本人にとってのいれずみは一般的ではなく一部の層に限る物であったことがわかる。

現代、若者を中心に、「いれずみ」というよりも「タトゥー」と表現すべき身体加工の印象は変わって来ていると言えるだろう。しかし現在の日本では、いれずみに関する衛生管理の基準や免許や資格は設けられていない（アメリカやカナダでは、タトゥーの施術師は一種のアーティストとしての地位が認められている）。無免許の者が衛生管理に対する知識も持たずに人体に針を入れ、出血も伴う施術による感染症などの危険性はゼロでは無く、そのような行為は医師法により禁じられている。「他人の体に針を入れる行為は医師以外が従事すれば違法」なのである。また各都道府県には、18 歳未満に対してのいれずみの施術に関しての条例がある。「北海道青少年健全育成条例　第 4 章　青少年の福祉を阻害する

[15]安田徳太郎 1959 年『人間の歴史２　日本人の起源』光文社 p.16.

おそれのある行為の制限　第 39 条」にいれずみの禁止について、以下のように定められている。

「1．何人も、青少年に対し、入れ墨を施してはならない。」
「2．何人も、青少年に対し、入れ墨を受けることを強要し、勧誘し、又は周旋してはならない。」[16]

この様にいれずみについての規制は存在しながらも、日本国内には数多くのタトゥースタジオが存在している。施術については、事実上黙認状態なのである。そのため、日本国内に拠点をおくタトゥースタジオ経営者は、いつ摘発されてもおかしくないというリスクを背負ってスタジオを経営している。表面上はデザインスタジオや飲食店を経営しながら、信頼のおける客にのみタトゥーの施術を行っているケースが多い。札幌市南区でタトゥースタジオを経営する茂野健さんもその一人であり、「Mountain high tattoo works」「Mountain high design works」という二つの店名を持っている。茂野さんは、「彫り師の仕事を資格制にすべきだ。しかし、資格制にすれば日本という社会がタトゥーを社会的に認める事になるのだから、政府がわざわざそうする訳はないが。」と言う。このような状況下でなおタトゥースタジオが日本に存在し続けられるのは、刺青は「同意傷害」（＝自らの身体に傷を付けるのを手伝っているという事になる）であり、客自ら彫り師のもとに出向いて、依頼するという形で行うため、事実上黙認という状態であり続けられるケースが多いのだという。しかしいつ摘発されてもおかしくない状況である。なぜこの様なリスクを抱えてまで、タトゥースタジオを経営するのかという質問に、茂野さん（数年前から、グラフィックデザイナーとしてお菓子のパッケージなどをデザインしており、現在もタトゥースタジオとアートスタジオの両方を生業としている）は、「タトゥーは消えないアート。お菓子のパッケージと違って用済みになったら捨てられる物ではないから、自分の作品をその人の生きているうちはずっと見て貰える。生き続けるアートだから。」と答える。茂野さんはまた、SNS やスタジオのブログで自らの”アート作品”としてのタトゥーを紹介している。その理由は、「日本人の多くは、タトゥーへの嫌悪感を持っている。私の役目はタトゥーを入れている人への理解をしてもらう事だ」と言う。作品写真の他にも、自らが調べ上げたタトゥーに関する知識や情報をブログ上で提供し、世界に発信し続ける事で刺青

[16]北海道青少年健全育成条例（昭和 30 年 4 月 2 日条例第 17 号　平成 27 年 7 月 21 日第 39 号改正）

への理解を深めて貰おうという考えがあるそうだ。

現代でもタトゥーに対する嫌悪感を持つ人がいるのは第１章で述べた日本におけるいれずみの歴史がある限り、払拭する事は難しいが、現代のタトゥーについての知識や情報が日本全体として限りなく少ないという事も一つの要因であるかもしれない。対してアメリカでは､2005年夏よりA&E局がラスベガスにあるタトゥー専門店｢Hart & Huntington Tattoo Company」でのエピソードをドキュメンタリー形式にした「INKED」という番組を放映開始し、タトゥーの被施術者の心境やタトゥーを入れる理由や背景を紹介する様になった。このような番組が放映されるという事は、アメリカ人にとってタトゥーは「タブー」では無いのかもしれない。だが、日本人が思う「アメリカ人は、みんなタトゥーに対して寛容だし、ファッションとして受け入れられている」という印象は、必ずしもそうとは言えない。ただ、この様にメディアがタトゥーを肯定的な物としての報道の仕方をする事によって、アメリカではタトゥーの印象は大きく変わる可能性はあるだろう。

終章

自らの好みで身体に施す身体加工である現代の「タトゥー」に関して、従来の「いれずみ」と共通する点も見られたが、現代のタトゥーは、他人に「見せる」ためでは無く、自身の中でのみメッセージ性を持つ様に、他人には「見せない」事を前提としているため、第２章で述べた自己呈示の手段として成り立つものではないことがわかった。そして第３章ではタトゥーのファッション化について考察したが、ファッション感覚で “タトゥーはかっこいい”“タトゥーを入れている人はカッコイイ” というイメージで、自ら刺青を入れる若者が増えている事は事実であるものの、その小さなワンポイントタトゥー（星やハートなどのマーク）や、一言のレタリングタトゥーの中にもそれぞれの決意や覚悟、目標や生きる指標が隠されている事がほとんどだそうだ。もちろん中には覚悟や意味も無く入れてしまった場合には様々な理由でタトゥーを消す必要が出て来るケースもあり、実際に茂野さんにタトゥーを消したくなったと言う客はいるのかという質問をした際には､｢昔入れたタトゥーが気に入らなくなっても、消したいという人は少ないと思います。皆さん、どんなにひどいデザインでも、そのタトゥーを入れた事自体に思い入れがあるから消したくはない。だから、上から新しいかっこいいタトゥーを入れて、カバーするのです｡」とのことであった。ただ無意味な見た目だけのお洒落のために痛みを我慢する必要はないのであ

る。タトゥーを入れる事で自分を変えよう、新しい自分になろうとする。そのための手段として、現代ではタトゥーの存在意義が認められるのではないかと考える。

タトゥーはアクセサリーの様に一度入ると簡単に取り外す事は出来ない。その年その季節に何が流行する、という物では無い。現代も、タトゥーはファッションでは無いのである。タトゥーは、言わば文字や絵柄に隠されたメッセージであり、他人に見せるためではなく自分だけに分かるメッセージが含まれるという事に意味があるのである。

現代、タトゥーを入れるという事は“一生消えない”アイデンティティの刻印なのである。

引用文献

（1）ヤコブ・ラズ著　高井宏子訳　1996 年　『ヤクザの文化人類学－ウラから見た日本—』岩波書店

（2）安田徳太郎　1952 年　『人間の歴史 2　日本人の起源』光文社

ベルツ（1883）

（3）北海道青少年健全育成条例（昭和 30 年 4 月 2 日条例第 17 号　平成 27 年 7 月 21 日第 39 号改正）

参考文献

（1）加藤秀俊、多田道太郎訳、河相全次郎発行　昭和 60 年

『みっともない人体』鹿島出版会

(2)久保真人　1998 年「大阪教育大学教育学部）社会心理学研究　第 14 巻第 2 号 78 −85

自己評価と自己呈示スタイルとの関係」

（3）松田修　1989 年『日本刺青論』青弓社

（4）中野長次郎　1988 年『刺青に生きる』日新報道

（5）　岡部修一　2012 年『現代スポーツを考える　スポーツ選手の入れ墨が影響するもの』奈良産業大学地域公共学総合研究所

（6）小野友道　2010 年『いれずみの文化誌』河出書房新社

（7）斉藤卓志　2005 年『刺青墨譜　なぜ刺青と生きるか』株式会社シナノ

（8）瀬川清子　1998 年『アイヌの婚姻』未來社

（9）礫川全次　1997 年『歴史民俗学資料叢書　刺青の民俗学』批評社

（10）バーナード・ルドルフスキー著

（11）山本百合子　2008 年「体の美しさに関する研究(その 19)：化粧の文化について(3)」

（12）山本芳美　2005 年『イレズミの世界』河出書房新社

（13）吉岡郁夫　1989 年『身体の文化人類学　身体変工と食人』雄山閣出版